

する。この木の葉もこんなに黄色になつたのね、する分散つた、きれいな赤い葉つ葉ね。なぞ話し乍らきれいな葉つばは集めて遊ぶ。地方によつてはする分木の遊びにいろ／＼工夫があるやうである。はつて模様をつくつたり、切つておもちゃを作つたり、

布にたゞいて染めたりする。おまゝごとの「ちさう」にもならうしお皿にもなる。縦横にあそべる。その一方ぬりゑや切紙や寫生など、中でもきれいで形のいい葉をつかつてすることにする。

## 談

## 話

志村貞子

五郎さんと鬼

一年中で一番空のきれいなのは今ごろではないだらうか、それには遠足や運動会などで何かと空に关心をもつ機会も多い。今日は空を見ませうねといふのではなく、機會を捉へて空を見る。たゞ何と青い空なのでせうと言つて仰ぐだけでもいゝ、又ふと仰いだ空に形の面白い雲が浮んでゐるやうな時あの雲大の顔のやうねな話を見て見るのでいゝ、さういふことから次々に子どもは想像の世界に入つたり、又現實の世界に戻つたり、話し合ひ乍らみる。斯うした、觀察といふにはあまり淡いことのやうであるけれど、ことゝ思ふ。

菊 大岩先生の御指導でまことに小さい乍らおへやの前の箱鉢に菊が咲いた、小さくても香も高く、色も美しい。このごろのおへやの花瓶には菊をいつも活けて置く。高いが強すぎない香がお室にみちてゐることがある。いゝ香ね、と子どもと一緒にかいでのる。まゝごとのごちさうに、兵隊ごつの勳章にといふ歌そのま

ま遊びに使つたり、寫生などの材料にする。この花が皇室の御紋章になつてゐることを語してきかせる。植物の中で分化の程度の高い花だといふことは保姆だけが知つてゐればよい。

鳥を可愛がつてゐる五郎さんが或日釣りに行つて鬼につかまへられてしまひます。そこへ鳥が出てきて五郎さんをたすけ、五郎さんに、鬼の寶物の絲と刀を渡して、「鬼に追ひかけられたらこれを後の方に一つづつおなげなさい」と教へます。五郎さんがどんどん逃げ出しますと、氣がついた鬼は風のやうに早く走つて追ひかけて來ました。すぐ追ひつかれさうになりました。五郎さんが、一筋の絲を後に向つて投げますと、忽ち大きな山が出來てしまひました。鬼が一生懸命山を登つてゐる間に、五郎さんは大分逃げましたけれどまたすぐに追ひつかれさうになりました。そこで刀をさつと後に投げますと、みると中に大きな川になり、あたり一面霧でみえなくなつたので鬼はたうとう五郎さんを見失つてしまひ、五郎さんは無事にお家へ歸られたといふお話です。古事記の黄泉の國を云々するまでもなく、亦外國の童話をひくまでもなく、このお話はこのお話をとして面白いと思ひます。たゞ鬼への恐怖と興味で子供達を引きづることのないやうにしたいと思ひやす。鬼と本當の鬼ごっこをした五郎さん

の氣丈夫さを何となく感じ、あゝよかつた、あゝ面白かつた、それでよいのだと思ひます。

しかし逃げるのは意氣地がない、鬼を追ひかけて捕へるやうでなければ頼もしくないおつしやる方はさうなさるものよろしいでせう。しかしこれとそれとは自ら問題が別であります。

ねんねんねむの木 森の中の大きなねむの木に赤い帽子をかぶつたきつゝきが巣をつくつてゐて、いつもお晝すぎになると、「ねんねんねむの木、ねんねの木、ねんねにおいて、ねにおいて」とよい声でうたひます、「歌をきくと、森の中の鳥の子や獣の子はみんなうとくとねむくなつてこのねむの木の下に集つてきます。するとねむの木は、つぼめた葉をそつとひらいでねむつてゐる子供達をすつかり吸ひこんでしまひ、その子供達はいつまでたつてもお家へ歸つて來ませんでした。或日のこと、蛇から、きつつきを貪かす方法を教へてもらつた子兎は、ねむいのをがまんしてきつゝきのところへ出かけます。そしてきつゝきが帽子をぬいた時に、「きつゝきさんの頭は眞黒の黒ん坊!!」と大きな聲でさなりますと、その聲にびっくりしてねむの木はつぼんだ葉を一度にぱつと開きました。すると今までねてゐた森の子供達もみんな一度に眼をさまして、すとん／＼と一度にとび下りてさんざんお家へ歸つたといふお話です。話す方の意のあるところについて、種々内容を持たせることが出来ますが、どこまでも明るさを失はないやうに話したいのです、更にいへば歌に誘はれてお家へ歸ることが出来なくなることを強調して、そこに特別の意味

を持たせることがないやうに希みます。

石の田 何でも欲しいものが出来る石の白を賣つた春子さんのお話です。春子さんはこれでお誕生日に甘味しいお汁粉を出してお友達に御馳走しました。お友達の夏子さんはこのお話を聞いて石臼を借りてスープを出します。ところが借りる時に止め方を教へてもらはなかつたので、スープはどん／＼溢れ出て大困りをします。やつと春子さんを呼んできてとめてもらひました。船に積む鹽を出す爲に石臼を借りた水夫さんも止め方を聞かずに急いで行つてしまひましたので鹽は何時までも止りません。「石臼はまだ海底でさく／＼と音を立てながらどん／＼鹽を吹いてゐます。海水はその爲にあんなに鹽がくなつてしまひました」と結んであります。この結びはあまり唐突すぎて如何かと思ひます。こゝに結ぶ爲にこれまでお話をすゝめて來たといふ感じも致します。先生のお好み、或は幼児の喜びきうなもの、この石の白がいろいろ取り出して幼児と共に楽しみつゝ、楽しい氣持で、満たされた氣持でお話を終りたいと思ひます。

森の親子 秋の森の中のお話です。紅葉や銀杏の子供達はお母様から紅や黄のきれいな着物を着せていたゞいて大喜びで、着物をかへない常綠樹の惡口を云つたりします。その中に寒い北風が吹くやうになると、威張つてゐた子供達は皆飛ばされてしまひ、常綠樹の親子だけが楽しいお正月を迎へたといふお話です。

始めの樹の親子の会話、落葉樹が吹き散らされる時の形容等に如何かと思はれる點がありますが、觀察話といふ観點からみると

その一つの行き方としていろいろあることがあると思ひます。たゞこの話のまゝでは落葉樹の運命を悲惨と感じさせたり、悪口を云つた報いを感じさせたりしないでもありません。

この話から取材して、先生の方の頭の中でもつと明るい構想を練つて、表現していただきたいと思ひます。更に、寒さに耐へてゆく常緑樹の姿、寒風にさらされてゐる落葉樹の枯木のやうな幹に、枝、春を迎へる新たな生命の躍動がこめられてること等も明るい、力強いお話をとして聞かせたいのです。

**瘤取り爺さん** 所謂昔嘗の瘤取り爺さんです。たゞここで誠に嬉しいのは、鬼に瘤を取つてもらふのにわざと惜しい様子をする

といふ技巧もなければ、まして、その瘤を翌日出かけて行つた悪いお爺さんにくつゝけるといった勸善懲惡的結果に終らせてもないことです。

「ほんとに面白がつたのね。明日の晩、又あそびませう。お爺さん、又いらっしゃいよ。それでは何かお約束の爲、おあづかりしませうね」「何をあづけておかうかね」あゝ、この瘤がいゝ、この瘤がいゝと皆でウーンと瘤を引張りましたので瘤はきれいにと

れてしまひました。「アハハハ」と皆は大笑ひ、お爺さんも大わらひ、「それぢやさやうなら」と鬼の子は歸つてしまひました。お爺さんは、瘤がなくなつて顔がかるくなつたので大よろこび、急いで家へかへりました。

この頃らかさ、愉快さをこのまゝの聲を以て幼児の心に傳へたいのです。

## 手技

### 及川 ふみ

十月は心身鍛錬に一年中最もよい季節である。幼児たちの楽しむ運動會も、遠足もこの心身鍛錬の上から、その目的を充分にはたず様に今年は殊更にその計畫を慎重にしなくてはならない。

この月の手技も、その材料もこんなところから取つてみたいと思ふのである。

#### 運動會

幼児たちの楽しみの頂上であつた運動會を主題として手技の材料を考へて見る。

これは粘土製作、紙仕事、いづれの方法によつてもよい。年少

組、年長組によつて粘土製作をとり、或は紙仕事をとつてもよいし、又或は兩者入れませて作つてよい。時節柄會場の裝飾などは簡単にしておいて、幼児たちの運動會での活動の状況がよくあらはされるものがよい。幼児體操をしてゐるところであるとか、運搬競走をしてゐるところであるとか、或は兵隊ゴツコの場面であるとか、こんなところに製作物の目標をおいて計畫をたてゝ見たい。細かい部分をあらはさないでたゞ競走をしてゐる人、兵隊ゴツコの兵隊さんは粘土で簡単に作ることにする。粘土も運動會の様にしばらく保育室の一隅に並べておいて次々と製作を續けてゆく様な場合にはこわれがたい紙粘土がよい。泥粘土で作